

## 第2回 『戦争体験談語り継ぎ部養成講座』 西川 虔一 氏 (H25.11.26)

### ～軍隊の始まりや文明開化、朝鮮戦争・日清・日露戦争、 大正時代・昭和初期の日本の経済状況について～

私は大正10年11月26日に生まれ、何かのご縁なのか今日は11月26日で、私の誕生日に当たっております。長い長いと思う一世紀ですが、私ももうすぐ一世紀を過ごすわけで、本当に今昔の感に堪えないのでございます。

軍隊の始まりは神武天皇からで、「神武天皇」といわれるまでの名前は「神日本磐余彦尊(かむやまといわれひこのみこと)」という名前でした。高御位(たかみくら)につかれ天下に号令されたのです。それが皇紀元年、紀元前660年のことで現在に至っております。

神日本磐余彦尊は神武天皇として天下に号令されたのですが、日本には強欲の塊のようなものがたくさんおまして、神武天皇が号令されてもなかなか言うことを聞くようなものはいませんでした。それで東へ、四国・淡路・和歌山・奈良へと平定していかれました。その時、金の鷲が神武天皇の弓に留まり、そのあまりの眩しさに敵は目がくらみ、戦況が大逆転したというような伝説もございます。

それ以後、外国からの攻撃はあまりなかったのですが、元寇の乱では元の国、今の中国から何百隻と軍船を従えて、軍隊が博多湾にやってきました。北条時宗が元の国の皇帝フビライの使者を殺してしまったので非常に怒り、元が軍船で博多へ攻めてきました。九州の武士達も負けてたまるかと激しく戦いました。そうこうするうち台風が来て、元の軍船は全部沈んでしまいました。元軍に勝ったのはこの台風「神風」のおかげであるということで、大東亜戦争の特攻隊や決死隊はみな「神風」という名前がついていて、日本軍には神風が味方につくから、戦争には絶対負けないと教育されました。小学校でも神風のおかげで必ず日本が勝つのだと教えていたようです。

徳川末期になりますと、外国のいろいろな国々から日本各地の港に船がやってきては貿易をせまるようになりました。そうした中、黒船騒動があり、「太平の眠りをさます上喜撰 たった四杯で夜も眠れず」という狂歌が流行ったりしました。上喜撰(じょうきせん)は高価な宇治茶で、四杯も飲むと夜眠れなくなることと、ペリーが黒船4隻(実際は蒸気船2隻と帆船2隻)で来航したのを掛けた歌です。

それから明治維新に入ります。この黒船を見て、日本は軍備の重要性を知りました。国をあげて自覚し、軍備の増強を行ったのです。徳川幕府は鎖国をやめて、外国との交流を始めなければいけませんでした。

中国は欧州から流入したアヘンや梅毒に苦しめられましたが、日本は貿易につとめても、外来の伝染病が流行するようなことはありませんでした。この時期になりますと、日本は船を造る等、軍備の増強で忙しくなりましたが、同時に伝染病予防の衛生観念も教育したようです。

外国からの攻撃を恐れて、日本は国をあげて軍艦を造り大砲を造りました。そして大東亜戦争まで軍国主義の時代が続くのです。

さて、日清・日露戦争等に至るまでの朝鮮と日本の交わり方についてですが、豊臣秀吉は朝鮮征伐を行いました。失敗に終わっています。その後は大きな敵対関係も特別に親密な関係もなく互いに過ごしてきたわけですが、明治時代に日本が韓国を併合し、朝鮮王室は日本の準皇族となりました。姫路

の近衛歩兵第10連隊の連隊長も朝鮮の方がなっておられたようです。

まず、日清戦争に至る経緯をお話しましょう。

中国の勢力が朝鮮を脅かして攻め行ったことがたびたびあるので、日本はじっとしておれなかったのです。朝鮮を取られてしまったら日本が危ない。あまりにも清の挑発が大きいので、ついには日清戦争が勃発します。日清戦争に勝利したことで日本は「軍備を拡張しておいて良かった。清を倒した」と有頂天になってしまったようです。

日清戦争が終わり、日本は賠償として遼東半島と台湾などをもらいました。これに対して、フランス・ドイツ・ロシアの三国が「日本が清から遼東半島を賠償としてとると東洋の平和が乱れるので、清に返還なさい」と勧告してきました。世に言う「三国干渉」です。日本は日清戦争を終えたばかりで経済的にも苦しいのに、嫌と言えはまた戦争になってしまうので、泣く泣く遼東半島等を清に還しました。こうして日本の占領地は台湾だけになり、台湾は日本の国になったのです。台湾はその後大東亜戦争で負けるまで日本の国でした。警察官や教員が日本から台湾へ行ったりもしたようです。

次に日露戦争に至るまでですが、ロシアは大連等を日本が中国に還したあと、それを99か年の契約で借り受けました。香港は英国、マカオはフランスが借り受けました。香港は日本が攻撃をして破壊されていましたが、すぐに英国が復旧して中国に負けないぐらいの勢いを持っていました。

日本は10年の間、ロシアにとられてしまった所を取り返さなければという意識がありました。ロシアは海に面した所がないので陸路を使い、満州や大連へたくさんの兵隊や軍備を輸送してきました。それでは、日本もまた戦争になってしまうというので、沖禎介や横川省三が鉄橋を爆破して、ロシアから満州へ物資を持って来られないようにしました。軍人ではなかった横川省三等が鉄橋を爆破したことでわかるように、一般民衆がロシアに対して敵愾心をもっていました。

ロシアは満州以外に朝鮮にも政治干渉を行ったため、日本は日清戦争までに作っていた日韓保護条約を盾に日本軍を朝鮮へ上陸させ、そして日露戦争が始まったのです。日露戦争は日本軍も敵と対等に戦えた戦争でした。そして満州で大山巖将軍がロシアを倒しました。203高地で攻撃するのに大変苦勞されたのが乃木将軍でした。乃木将軍は2人の子どもまで、203高地への攻撃で亡くし、最後には夫婦とも自決されました。

ロシアは非常に大きな国でありましたが、内部におきましては共産主義の力が勢いを得ており内戦状態であり、内側から崩壊し、アメリカのルーズベルトの仲介で日本に負けてからはソビエトという思想的な国になっていきました。

それから大正に入ります。ドイツとフランスが第一次世界大戦を起こしました。フランスはドイツに徹底的にやられました。英国や米国に助けを求めて世界大戦にまで発展し、日本もドイツに宣戦布告をして、日本の賠償対象であったチンタオにドイツの兵隊がたくさん駐留していたのを攻撃して落としたのです。

その時分から日本も教育が盛んになり、中学校の体育が非常に大切だということで文部省も力を入れて、中学校の野球大会などに将兵を派遣して中学生に軍事訓練を受けさせました。そして軍事訓練を受けた中学生は軍隊に入りました。もちろん青年団にも軍事訓練はありました。こうして軍国主義に力を入れて、大東亜戦争まで進みました。その頃の日本は電気・水道の高率化に資金をつぎ込むのと同じように、そういう所にもたくさんお金を使っておりました。

大正天皇が亡くなられて昭和が始まります。昭和天皇は昭和3年に初めて国民のお祝いを派手に受けました。村々では太鼓を出し、婦人会は踊り、夜は提灯行列をつくり、昼は子供達がだんじりを引きま

した。その時は『東京音頭』が流行り、にぎやかでした。しかし景気はだんだん悪くなり、欧州大戦以降に欧州が大恐慌に陥ると、日本もその余波を受けまして不況になりました。

特に農業は言葉に表せないような状態が続いておりました。米の値段は1石20円でした。鉛筆は1本1銭、消しゴム5銭、筆10銭ぐらいで、物価は安かったです。しかし米1石20円では農家はとても生活が出来ず、小作料が高いので小作料を地主に払うともう食べていけませんでした。農業経営の合理化でも農村更正運動でも成果が上がらず、ブラジルに移民をするにしてもうまくいきませんでした。

昭和6年に満州事変が起きました。張学良・張作霖親子が満州鉄道を爆破したということで、「満州鉄道の權益を守るため」として日本は軍隊をどんどん送ったのですが、実際は日本の関東軍が自ら爆破しておきながら張学良・張作霖親子が爆破したという名目をつけて軍隊を送ったのです。

この満州事変をきっかけとして中国からの独立運動を行い、満州を独立させ、日本軍が満州の土地を治めました。清皇帝を満州の初代の皇帝として即位させて満州国が生まれましたが、アメリカや英国をはじめとする世界各国が「勝手に日本が満州国をつくったことは承認しない」と反対しました。ただ、ドイツとイタリアは賛成でした。のちの三国同盟が出来た経緯もそういう所にあるのです。

日本は日露戦争で賠償として貰った鉄道を運営するため満州鉄道を設立し、満州移民を考えました。そして満蒙開拓義勇軍を編成して満州へ行き農地開拓をしました。東北地方では部落ごと満州へ行ったところもあります。

満州での攻撃も終わりました大東亜戦争に移りました。

大東亜戦争開戦当初から、出征兵士を送るために内地では大変でした。

徴兵制というのは、明治時代に三大義務「納税・教育・徴兵」が出来てからはじまりました。20歳から40歳までの男子は兵役に服する義務が課せられましたし、子どもたちは義務で教育を受けていたので、不登校の子がいたら巡査が学校に連れに来ました。それでも4・5年生の多くは百姓の手伝いをしていて、農業の手伝いをして遅刻すれば褒められました。そういう時代でした。

私は16歳から満蒙開拓少年義勇軍に志願して行きました。不況の部落は部落ごと満州へ行って開拓しました。

満州は金の卵を産むニワトリでした。村長が出征兵士を送る挨拶の中に「満州国は日本の生命線である。」と話をされていたのを思い出します。満州は広い所で百姓も出来ましたし、また、満鉄重工業という大きな会社が出来まして、満州の事業を担っていました。

そういう時代に上海で排日運動が始まりました。大山大尉が殺されたり、日本の領事館や居留地の者が迫害を受けたりしたので、内地から上海事変を鎮圧するために海軍陸戦隊が上陸し、激しい戦闘が起こったのです。すぐに上海事変は日本軍が鎮圧しました。しかし日本は町を壊してはいないのですよ。店なども中国の兵隊を日本軍が追いやった後はすぐ営業が出来るという状態でした。

でも戦争は大変なことです。

戦闘の際はまず飛行機で攻撃しますが、後は歩兵隊が進んで行って町を占領し、宣布班が学校や自治体をつくり、そこで生活をしました。日本はそういう戦争をしてきました。

日本はあるだけのお金を使ってしまい、何もなくなってしまうました。それなのに大東亜戦争を始めなければならなかった。油も外国から売ってもらえませんでした。中国や東南アジアの物資を獲得するた

めに大東亜共栄圏をつくりましたが、そこではすぐに石油を手に入れることはできませんでした。これ以上どうにもならないということで、石油を手に入れるために大東亜戦争が始まりました。

日本は一度はスマトラ・シンガポール・フィリピン・ボルネオを占領しましたが、その後1年間の間にアメリカ軍や連国軍がそこに軍部をつくりました。そして大東亜戦争がハワイ真珠湾攻撃で始まり、日本も1回戦は勝ちましたが、連国軍は軍備を蓄えて日本が占領して護っている太平洋湾の島々のスマトラから東南アジア方面の島ガダルカナル・ラバウル・マリアナ島を全部逆に占領してしまいました。アメリカは島づたいにどんどんと攻めてきて、東南アジアやルソン島や沖縄へと日本を追いやりました。

私はフィリピン等で工兵10連隊として戦いました。工兵10連隊には当初960名程いましたが、帰ってきたのは45名です。私たちの中隊には当初360人いたのですが帰ってきたのは19人でございました。フィリピンのラバウルは死骸の山でした。

私たちは、台湾から13隻の輸送船と5隻の護衛艦でマニラに行きました。マニラに着いて夜に入港したのですが入港した時、港の中は船でいっぱいでした。暗闇の中で私達は「たくさん船がいるな」と思いながら入港したのですが、あくる日に見るとそれは10月の爆撃でマニラにいた日本の艦隊や軍艦が皆やられてしまった、その残骸だったのです。

昭和19年12月ごろには日本には一機も戦う飛行機が無い状態でした。それで戦闘機無しに最後の落下傘部隊が40機のMC輸送機でアメリカ軍が占領しているレイテ島へ降下に行ったわけですが、レイテ島に着くまでに全部敵の無線で発見されていました。

日本の航空機を落とすためにアメリカ軍は大きな探照灯をトラックに積んでやってきました。光を当てて敵の航空機を打つわけですが、アメリカは一発でどんどん撃ち落としていきます。40機の飛行機もあつという間に兵隊を積んだまま撃ち落とされておりまして。

倒れていった者は戦闘で半分、栄養失調やマラリアなどの病気で半分です。

米軍が進んでくるにつれて青い山々がだんだん赤い色になってくるのが戦場です。爆撃と攻撃によるものです。最後には火炎砲で焼き払われます。死骸の首や足は飛んでいるし、内臓はそこらの枯れ木にぶらさがっているというような、ものすごく激しい戦争でした。

私もこの戦争で山の上から投げられた手榴弾が背中に当たり、身体に破片が入りました。すぐに化膿します。ハエが膿みを取ってくれますが薬は一つも無いし、食べるものも何も無い。それなのに命令はあるわけです。

私は栄養失調で亡くなった者の遺骨の小指を切って持って帰ろうとしましたが、アメリカ軍の捕虜収容所に収容され、並ばされて裸にされシャワーを浴びたときに、着ていた服は「病気にならないためだ」と燃やされ、無くなってしまいました。

戦場で病気になった者は死んでいきました。

仲間の一人に「一緒に寝てくれ」と横穴の中で言われ、一緒に寝てやったことがあります。彼は私に抱きついて「おっかあ、おっかあ」と言いながら死んでいきました。彼が抱きついた私の胸が、今でもときどき痛くなります。

あれほど激しい戦争はもう二度とあつてはならないと思います。

戦地から生きて帰ってきた者が毎年法事をして護国神社にお奉りをしておりましたが、一人また一人

と亡くなり、工兵10連隊で今生き残っているのは私一人になりました。

それで私は仁王様を彫刻しました。この仁王様には武器を持たせておりません。武器を持たない仁王様として百代寺に安置されております。また、私は毎日毎朝5時に起きて平和の祈りをささげるため、お寺参りを千日いたしました。今は千五百日を目標に毎日お参りしております。

戦争は悲惨なものでした。戦争が起こるようなことがあったらどんなことがあっても止めなければいけないと思います。

——ありがとうございました。